
冬の始まりは彼女と共に。

零・ZA・音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬の始まりは彼女と共に。

【Nコード】

N4057B

【作者名】

零・ZA・音

【あらすじ】

ある朝の出来事。俺とあいつの少し変わった恋の結末。

吹き抜ける風に冷たさを纏った空気が、暴れながら通り過ぎていく。
目に入る風景は紅葉こうじして、次第に茶色の枝が目立つ事になるだろう。

冬はもうすぐそこまで、やって来ているのだから。

俺が歩けば、後ろから同じような歩調で歩いてくる足音が聞こえる。止まれば、その足音も止まる。

ストーカー？

なんて男の俺が、そんな心配をする必要はない。そもそも、ストーカーでもないしな。

大体、今は朝だ。これから学校へ向かうと、通学路を歩いているだけ。しかし、このストーカーもどきは、家からずっと着いてくるのだから、まったく困ったものである。

「……なあ」

振り向きもせずに呼んでみたが、どうやら動揺しているようだ。後ろで慌てふためく声と音がしている。

あ、どうやら転んだみたいだ。少し鼻をすすする音が聞こえる。俺が話し掛けたのが、そんなに驚く事か？

「何をやっているんだ？ お前は」

「べ、べつに？」

小さく雑踏の音に掻き消されそうな声。こいつの声はいつも思うが、聞き取りづらい。

でもこれが、こいつの精一杯の声なんだ。

だから俺はその一言一言を聞き逃さないように、しっかりと耳を傾ける。

しかし、何故に疑問に疑問系で返す。別に、は答えになってない

だろう。

まあ、聞いても答えはくれないと思うけど……。

「そうか。なら、いいけど」

「ふえ……ひつく……」

しかし、今日は予想外の事が起きている。後ろから聞こえてきたのは、まさかの鳴咽。

慌てて後ろに向くと、顔を覆っている姿が目飛び込んできた。

「ちょ、おい！ 何を泣いてるんだよ、美優^{みゆう}」

「だつてえ……。お、おにいちゃん、おこつて、るん……。だもん」
目元を擦りながら必死に喋っているが、言葉になつていない。

まったく、こいつは高校一年生になつても、泣き虫だけは変わらないって事か。

いつもは、これぐらいでは泣かないくせに、今日はまたどこでスイッチが入ったんだかね。

「怒つてないから、涙を拭け。みんな見てるぞ」

「あう……。お兄ちゃん、ご、ごめんねえ」

周りから冷やかな視線を向けられているのは、俺。別に俺が泣かしたわけじゃないぞ。

頭をポンポンと叩いている俺を見上げるその瞳には、まだ薄つすらと涙が浮かんでいる。

まったく、世話のかかる奴だ。ちょっと荒っぽく涙を拭つてやると、慌てたような顔をして俯いてしまった。

「ふう、まったく。それで……。一体、俺が何に怒つてると思ったんだ？」

「そ、それは……」

少しだけ顔を上げて、俺の顔色を伺うような視線を向けてくる美優。

何を怯えているのか知らないけど、俺は心当たりがないんだがね。まったく、何をしたんだよ……。こいつは。

「お兄ちゃんの……大切な、プリン食べちゃった、から」

啞然としてしまった。

何を泣いているのか、思えばそんな事かよ　って、何！

「食べたって……、あの、俺の大好物の『とろけて幸せ　ぷるんプリン』を食ったのかっ」

「ひゃう！　だ、だって、おいしそうだったから」

「あれは、大事に取って置いたものなんだぞ！　一個、500円もする超高級品プリンをっ」

「はう、ごめんなさいっ」

頭を抱えてうずくまっている美優に、怒りの制裁を加えないと気がすまない。

だが、今日はよし、とするか。まったく、ろくな事をしない奴だな。

「まったく……。食べたものは、しょうがないか」

だけど今回は、正直に答えたので勘弁してやろう。

いつもは、なんだかんだ言っ、素直には話してくれない奴だから、今日は奇跡に近い。

しかし、いつの間に俺の家に侵入したんだよ。隣の家からそんなに簡単に入れたかな？　俺の家って……。

一応、勘違いが無いように言っておくが、こいつは俺の妹ではない。隣の家の娘っ子だ。

子供の頃から一緒にいるので、俺の事を「お兄ちゃん」と呼んでいるわけだ。

「そ、それでね……」

「なんだ？　まだ、何かあるのかよ？」

そう聞くと、俺を見上げながら涙を目にいっぱい浮かべている美優。なんで、そんなに潤んだ瞳をしているんだ。

これはまた、なんとも言えない表情だな。お兄ちゃん、変な道に走っちゃうぞ？

「お兄ちゃんの大切にしてた……ロボット、壊しちゃうわぁ〜ん」

最後は泣き声と一緒に、何を言っているのか、さっぱりだ
ったけど犯人は、やっぱりこいつか。

確かに、俺の部屋には子供の頃から、大切にしているロボットの
プラモデルがある。

それが昨日見たら、見事に腕だけが取れていた時には、正直驚い
たが誰がやったかと考える前に、こいつの顔が浮かんできた。

でも、あれは子供の頃に俺が壊したから、腕は元から壊れていた
んだ。

だから、こいつが壊したわけではないんだが　それでも、こい
つは自分が壊してしまった、と思っっているんだろう。

それにしても、俺がいる時には絶対に入ってこようとしなくせ
に、いない時にはいつの間にか入って、俺の部屋の中を荒らしてい
くともんでもない輩だ。まったく、何をしているんだかね。

「……まったく。それは、知ってるよ。お前以外に誰がいるんだよ」

「ご、ごめんなさい……」

「いいから、立てって。別に怒ってないから」

一向に立ち上がるうとしない美優は、俺から視線を逸らして座り
込んだままだ。

冷たいはずの地面に座り込んで、完全ストライキ状態。また、始
まったのか？

泣き虫のくせに、意地っ張り。

「ほら……汚れるぞ？　それに冷たいだろうって」

手を差し出しても掴まろうとせず、じっと俺の手を見ているだ
け。

手相でも見れるのか？

たぶん、俺の運勢は今日は最悪のはずだ。これが、最悪の原因な
んだがね。

本当に意地っ張りな奴だ、こいつは。

「別に俺は怒ってないんだぞ？」

「うう……」

唸らないで、立ち上がってくれよ。周りはすっかりと静かになつて、誰もいなんだぞ？

遠くて、学校のチャイムが聞こえているし、勘弁してくれ。完璧な遅刻ではないか。

俺、皆勤賞狙っていたのに。

「美優」

しゃがみ込んで美優の顔を覗き込むと、真っ赤になつて顔を背けて行く。

本当に、分かり易い反応をする奴だ。まったく、俺がお前の気持ちを知らない、とも思っているのか？

あれだけ露骨にされたら、幾ら鈍感な俺でも気付く、てものだ。

もう少し、まともな気の引き方が出来ないものかね。

痛いくらいに、真っ直ぐな気持ちをぶつけてくる奴。

おかしくて、笑いそうになつてくる。俺をチラチラと見ては、また視線を逸らして俯いてはの繰り返し。

泣き虫の女の子。それだけなら可愛いけど、憎たらしいほどの意地っ張り。

そして、不器用な気持ちを俺ではなく、俺の持ち物にぶつける。ものすごい三拍子だと思うぞ？ これ。

ちゃんと、俺にぶつけてくればいいのに。いや、そうすると俺が恥ずかしいか……。

「まったく、そこまで意地っ張りだと……彼氏なんか、出来ないぞ？」

「え？」

「ほら、掴まれ」

立ち上がっていく俺を、驚いている美優が顔を上げる。差し出している俺の手を、それでも掴まろうとしない。

さすがの俺も、これではお手上げだぞ。

まったく、はっきり言葉にしてくれれば、俺も反応しやすいんだが……。

いや、俺がはつきりすればいいだけの事か？ こいつの気持ちなんて、昔から気付いていたから。

「しょうがないな……。俺は、行くぞ」

「……え。あ、あ」

ちよつと意地悪をして、踵を返して行こうとしている俺を、明らかに動揺した声と視線を向けてくる美優。

その目には、すでに光るものがたまっている。置いて行かれるは嫌……と言つ事か。

まったく、世話がかかる奴だ。それでも嫌いになれないのは、俺もこいつと同じ気持ちだからだろうな。

「ふう……、よつこらしよ」

「ひゃ」

短い悲鳴を上げて固まっている美優は、目をパチクリとさせて俺の顔を見ていた。

あまりに立ち上がろうとしないので、思い切って抱き上げてやった。俗に言つお姫様だつこというやつだ。

「へ……？ え、へ？」

鳩が豆鉄砲を食らったって、こういう顔を言うんだろっな。

ちよつと、悪戯をしてやろうかと思うほどに、間抜けな顔をして呆けている。

でも、そんな顔も俺は愛しいと思っている。

「どうした？ そんなに驚いて、鼻水出てるぞ？」

「へ……？ う、うそ…はわわわ」

慌てふためいている美優の顔に、近づいて耳元にそつと囁く。

「あんまり、俺を困らせるな……、美優」

一瞬、キョトンとした顔をした美優だが、俺の顔が近くにあるので顔が真っ赤になっていく。

中々、面白いぞ。

「それから、俺の物を壊すのは止めてくれよ？　俺も困るから」

「あう……。ご、ごめんな、さい」

段々と縮こまっていく美優。身体を丸めて申し訳なさそうに俺を見ているが、顔は未だに真っ赤だ。

「それから、ちゃんと俺の目を見て「好き」って、言え」

「え、あ、はい。へ、え？　え、えええええ！」

面白い奴だ。この顔は是非デジカメで押さえておきたい顔だ。湯気を上げて茹で上がった、タコのように真っ赤に染まっている。ちよつと意地悪かとは思うけど、この際だから言っておこう。

「お前が、何をしたいのか知らないとしても、思っていたのか？」

「はう……」

驚きに見開かれた目というのは、面白いものだ。

それにしても、あれだけ色んな事をやっておいて、俺がまったく気付かないと思っている美優もすごいな。

俺だつて馬鹿じゃないぞ？

「まあ……。今のままでも、俺は構わないぞ？」

「え、あ……。えつと、その」

「言葉のままだ。俺は、今のままでも構わない……。お前が、そばにいてくれたらな」

恥ずかしいが、こいつからの告白を待っていたら、いつまで待つのか分らない。

それどころか、いつまで待っても、あのままなのかも知れない。それなら、それでもいい。

俺は、この気持ちを变えるつもりはない。だから、こいつにも無理に変わって欲しくない。

「俺のそばから離れなければ、それでいいよ……」

驚いている顔が更に驚きを表していく。しかし、それが次第に歪んで瞳が潤んでくる。

口が微かに動いて、何かを言っているようにも見えるが、何も声は聞こえてこない。

でも、声の変わりに伝わってきたもの。

「ほんとに……いいの」

「ああ、お前が良ければ好きなだけ、いればいい」

耳のそばで聞こえる嗚咽に、思わず笑みがこぼれてしまう。

泣きながら俺に抱きついてしている美優は、更に力をこめていく。その強さが気持ちの表れだと思う。

「うん……。ずっと一緒にいるよ」

その声が俺の耳をくすぐり、胸を満たしていく。

泣き虫で意地っ張りで、ちょっと我が侬だけど俺の可愛いお姫様。朝から何をしているのかと思われるかも知れないけど、俺はこれでいい。

俺達には、少し変わったのがお似合いだろうからな。

「ところで、このまま行くのか？」

「わ、わたしは……このままで」

三拍子に、これ追加。

真っ赤な顔のお姫様は、意外と大胆なようだ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4057b/>

冬の始まりは彼女と共に。

2010年10月8日15時36分発行